平成28年度

壱岐島医療と介護の研究発表会

プログラム・抄録集

平成29年２月２日（木曜日）

18：15～20：00

壱岐文化ホール（壱岐の島ホール）

平成28年度

壱岐島医療と介護の研究発表会
プログラム・抄録集

日時　平成29年2月2日（木曜日）　18:15～20:00
（受付開始17:30～）

場所　壱岐文化ホール（壱岐の島ホール）

総合司会　長崎県壱岐病院　牧山　晃

挨拶　在宅医療推進部会　会長　光武　新人

（発表6分/質疑4分/1人）

演題　Ⅰ　自由テーマ

【座長】長崎県壱岐病院　管理栄養士　横山　登美子　看護師長　馬場　敬子

【1】塩分摂取量と塩分閾値の関係について
社会医療法人玄州会　光武内科循環器科病院　管理栄養士　高尾　佳名

【2】当院における急性肺血栓塞栓症の現状
長崎県壱岐病院　診療放射線技師　竹松　泰宏

【3】食べられる喜びを共に　～テルミールゼリー食を美味しく～
社会医療法人玄州会　グループホーム　みのり　介護福祉士　植山　裕子

【4】病児保育所　“えだまめちゃん”　4年間の実績
江田小児科　内科医院　看護師　山川　美咲子

演題　Ⅱ　メンタルケア

【座長】介護老人保健施設　光風　通所リハ課長　久田　聡　管理部課長　野元　暁美

【1】「やっぱ壱州がよかばな！！」　～笑顔を取り戻せたチームケア～
医療法人　協生会　介護老人保健施設　壱岐　介護福祉士　佐々木　薫

【2】短期間で再入院となった独居高齢者の退院支援　～一事例を通しての取り組み～
長崎県壱岐病院　地域包括ケア病棟　看護師　黒岩　留美

【3】ご利用者様の「声」と「選択」がサービスの原点
社会福祉法人　壱心会　デイサービスセンター　壱岐のこころ　介護福祉士　酒井真樹
介護福祉士　松本　晃

【4】進行性核上性麻痺患者の精神的変化について　～行動や態度による心の推測～
社会医療法人玄州会　光武内科循環器科病院　看護師　杉山　郁果

総評　壱岐医師会長　江田　邦夫

研究テーマ：塩分摂取量と塩分閾値の関係について

所属施設名：社会医療法人玄州会　光武内科循環器科病院

研究者名　：管理栄養士　髙尾佳名（発表者）
殿川恭子　山本香菜　山本淳子　山内清香（共同研究者）

【目的】　近年生活習慣病の患者様が増加の一途をたどっている中、当院の外来患者様の多くも高血圧等を抱えており、その改善や重症化予防が大きな課題となっている。現在までに高血圧の患者様の塩分摂取量に着目し、それらの患者様へ尿中塩分排泄量の測定を行い塩分摂取量の把握に努めてきた。その結果、塩分摂取量が多い患者様は塩分の味覚が落ち、塩分閾値が高くなっているのではないかという疑問を抱いた。そこで、塩分摂取量が多いと推測される患者様へ食塩含浸濾紙「ソルセイブ®」にて塩分閾値を評価し、塩分摂取量との関連性があるのかを調べ減塩の指導に繋げることを目的とする。

【方法】1　期間　平成27年10月～平成28年2月
2　対象　当院に通院中の患者様のうち、高血圧で塩分摂取量が多く減塩指導後も減塩をうまく実践できていない患者様71名
3　方法　高血圧の患者様の尿中塩分排泄量を測定し、塩分摂取量を算出する。その後、食塩含浸濾紙「ソルセイブ®」を使用し塩分閾値を評価する。この時、患者様へ濃度は伝えずに段階ごとに舐めてもらい、評価後減塩意欲に関するアンケートを行う。

【結果】　「ソルセイブ®」を行い0.6 mg/cm²で理解した方を味覚正常、0.8 mg/cm²以上で理解した方を味覚異常とし、塩分摂取量の多い方々と塩分閾値との関連調査を行ったが、今回の結果からは塩分摂取量が多い方のうち味覚正常の方（ソルセイブ® 0.6 mg/cm²で理解）は76%を占めており、塩分摂取量と塩分閾値に大きな関連性は見られなかった。また、努力度によるアンケートの結果からは、塩分摂取量の多い方は減塩に対する意識を高く持たれている方が多く見られたものの、「塩辛や干物が好きでよく食べる」「減塩味噌を使っているが、多く入れてしまい味が濃くなる」「毎食味噌汁を食べる」「減塩を気にはしているが味はしっかりつけたい」等の理由が挙げられた。これらの結果から、塩分摂取量の多い方は、塩分閾値は正常だが濃い味付けを好む等嗜好の問題が塩分摂取量の過多に繋がっているのではないかということが分かった。

【結論】　塩分摂取量が多い患者様は塩分の味覚が落ち、塩分閾値が高くなっているのではないかという疑問を抱き調査を実施したが、塩分摂取量と塩分閾値には大きな関連性があるという結果には繋がらなかった。また減塩に対しての意識も高いが、実行までには至っていないことも分かった。この現状から私たちが取り組まなければならない課題は、減塩することでどのような効果が期待できるのか、患者様が減塩に対しやる気が起こる動機付けを行い、実践しやすい指導を行うことである。減塩することが患者様の生活習慣病の予防・重症化予防に繋がるようこれからも支援を続けていきたい。
また同時に、医療の枠を越え地域で減塩に努める体制づくりも今後の課題である。

研究テーマ：当院における急性肺血栓塞栓症の現状

所属施設名：長崎県壱岐病院　放射線科

研究者名：○竹松泰宏　土谷俊康　土谷耕三　長嶋浩司　藤田均　金丸武生

【目的】急性肺血栓塞栓症は血栓性塞栓子が肺動脈を閉塞する致死性の疾患であり，生活様式の欧米化，高齢者の増加，本疾患に対する認識および各種診断法の向上に伴い，近年増加している救急疾患である。しかしながら、本疾患の自覚症状は呼吸困難、胸痛、失神など特異的な症状はなく、疑わなければわからない疾患である。血栓が疑われたときの画像診断の第一選択は造影ＣＴであり、血栓を認めた場合は肺動脈内の造影欠損として確認できる。この血栓を見逃さないために画像処理として現状はどうしているか、常勤の放射線科医がいない中で今後どのような画像処理をしていけばいいのかについて報告する。

【症例】76 歳男性。右下腿腫脹を契機にエコーにて深部静脈血栓症を認め、急性肺血栓塞栓症の除外目的で造影 CT 施行。急性肺血栓塞栓症に対する検査手順は胸部から膝下までの撮影を行うため、膝窩部が圧迫されないようスポンジで調整しポジショニングする。右肘静脈より 22G でルート確保を行い、まずは胸部の単純撮影を行う。次に 3.0ml/sec で造影剤を注入し、注入より 30 秒後に胸部の肺動脈相を撮影する。120 秒後に胸部の平行相を撮影する。次に腎静脈から膝窩部まで平行相の撮影を行うが、血流の速さが年齢や性別といった因子に左右されるため、210 秒を基準に調整して撮影を行う。現状の画像処理としては肺動脈相の冠状断をスライス厚 3mm で作成するにとどまっている。

【結論】本症例に対して造影ＣＴは血栓を可視化できるため第一選択として優れており、全身撮影を行うため他の疾患に対しても有用であるといえる。撮影条件の検討のほか現状作成している冠状断に加え、MIP 像を作成することでより評価しやすい画像を提供できる。また当直帯に撮影する機会があり、造影剤副作用などのスタッフ間の理解も必要であると考える。

研究テーマ：　　食べられる喜びを共に
～テルミールゼリ-食を美味しく～

所属施設名：社会医療法人　玄州会　グループホーム　みのり

研究者名：　植山　裕子

【目的】 グループホームみのり入居者で終末期と判断され、家族が当施設での看取りを希望。食事を工夫し最期まで経口摂取し続けてもらう事で栄養状態改善され状態安定された症例を報告する。

【症例】 ９４歳　女性
疾患名　　肺Ｃａ再発疑い　高血圧症　糖尿病　慢性心不全

H28年２月中旬頃から誤嚥を繰り返し、食事摂取量低下、全身状態悪化。
3月下旬病院受診。　胸部、腹部に高度胸水、腹水の貯留認め終末期の状態。
ご家族は当施設で最期まで口から食べる事を希望された。
全粥、ミキサー食を中止しテルミールゼリー食（800ｋｃａｌ/1200ｍｌ/日）
５分割対応、食事姿勢、口腔ケアを徹底。
アルブミン値2.8ｇ/ｄＬから3.7ｇ/ｄＬへ改善、体重59.8Ｋｇから53.0Ｋｇへ減量。全身浮腫消失し全身状態改善。家族と共に外出、レクレーションへ参加された。

【結論】 人生の最後をどこで、どんな形で迎えられたいのか、誰と一緒に過ごされたいのか。看取りの状態になっても、最期まで美味しく口から食べて口から食べられる喜びが生きる力となる様に、家族の協力、他職種との連携を得て本人、家族の望む暮らしに寄り添えるようにしていく事が大切である。

研究テーマ：病児保育所“えだまめちゃん”４年間の実績

所属施設名：江田小児科内科医院

発表者名　：山川 美咲子

【目的】病児保育の利用実態を示すデータを統計的に調査・分析をしていく

【方法】１．これまでの病児利用者数、キャンセル数、お断り数集計
２．年令別の調査
３．疾患分布の調査
４．アンケート調査

【結果】１．平成２６年度、２７年度の年内利用者数が月平均にすると３名増えて、今年は１２月まで７人増えている。
２．年令別は１～３才までが多く男の子が２．５倍多い。
３．疾患分布調査では２６年度、２７年度共に気管支炎が多い。次いで喘息性気管支炎、上気道炎と咽頭炎が多い。
４．１ヶ月間調査して保育料が妥当だといわれる方が殆んど。中には高いと評価される方が数名いた。保育時間も妥当の方が多く、短いと答えた方が数名いた。感想としては病児保育があって助かると答えた方が多く、定員をもう少し増やして欲しい、等の解答もあった。

研究テーマ：「やっぱ壱州がよかばな！！」　笑顔を取り戻せたチームケア

所属施設：　介護老人保健施設　壱岐
発表者　：　佐々木　薫（介護福祉士）　石川　舞　　市山潤也　　田中　満

【はじめに】
今回、入所後環境・体調変化により認知症が進行し帰宅願望、徘徊、妄想、幻覚などの症状が出現。それらに対して家族の協力、介護での取り組み、医療機関との連携など様々な方面からの支援・対応により落ち着いた日々と笑顔を取り戻すことができたのでその取り組みについて報告する。

【事例紹介】
８８歳、女性。Ｈ２６年頃より認知症状出現。一人暮らしが心配となり長男が住む長崎で同居されるが「やっぱり壱岐に帰りたい」と強く希望され壱岐に戻ることとなる。移動は杖歩行、身の回りのことは見守りがあれば自分で行えるレベルだが独居は困難とのことでＨ２７年８月より当施設入所となる。

【経過と取り組み】
Ｈ27年８月入所後より帰宅願望あり、その後体調を崩され２度入退院を繰り返すがその都度認知症状は悪化し、それまでみられなかった幻覚、妄想、暴言、暴力などの症状も出現するようになる。約７か月間それらに対して介護、医療、家族も含め様々な方面からの支援・ケアを行った。Ｈ２８年７月頃より徐々に症状も落ち着き、９月には草取りにも参加されるなど穏やかな日々と笑顔を取り戻すことができた。

・介護　他職種共同でケアプランを作成、定期的に検討し本人の自立を促し意思を尊重するケアを提供、認知症状対応のためのカンファレンスを実施
・看護　健康状態の管理と医療機関への適切な情報提供、家族への情報伝達
・ケアマネ、相談員　家族への情報伝達、外泊の調整
・家族　ほぼ毎月の外泊、不穏時には月に数回の外泊など協力

【まとめ】
今回は、家族の理解と協力のもと、本人が安心できる環境を作ろうと様々な方面から対応を検討しケアすることで落ち着きを取り戻し、本人の希望する壱岐で自宅にも帰りながら笑顔で生活できるようになった。
このことを今後の認知症に限らず全てのケアに活かしていきたい。

研究テーマ：短期間で再入院となった独居高齢者の退院支援
～一事例を通しての取り組み～

所属施設名：長崎県壱岐病院　地域包括ケア病棟

研究者名：○黒岩留美　長嶋由美子　土谷昭子　門林秀弥

【目的】地域包括ケア病棟の看護師が退院支援・退院調整に求められる役割を明確にする。

【方法】1　期間　平成28年4月～8月
2　対象　A氏
3　方法　事例研究：データ収集方法・データ分析方法

【結果】1）事例概要：A氏：98歳、女性
2）退院支援、退院支援をする為の3段階プロセスに沿って評価した。
第1段階：スクリーニングとアセスメント
第2段階：受容支援と自立支援
第3段階：地域・社会資源との連携、調整
3）退院後の聞き取り調査

【結論】1　退院後訪問は、退院後の生活を実際に見ることで、自分たちの退院支援計画の妥当性を評価する機会となっており、患者を生活者として捉えた実効性のある退院支援計画にする上で重要であった。

研究テーマ：ご利用者様の「声」と「選択」がサービスの原点

所属施設名：社会福祉法人　壱心会　デイサービスセンター　壱岐のこころ

研究者名　：（発表者名）酒井真樹　松本晃（共同研究者名）鬼塚裕司施設長

【目的】　可能な限り在宅で暮らせるように出来ることはご自分で。
地域に喜ばれるデイサービス。

【方法】　１　期間：平成２７年１０月　１日～　現在
２　対象：ご利用者様／職員
３　方法：勉強会

【結果】　３つの成功事例と１つの失敗事例

【結論】　デイサービスセンター壱岐のこころは、
ご利用者様の「声」と「選択」がサービスの原点であり続ける。

研究テーマ：進行性核上性麻痺患者の精神的変化について
～行動や態度による心の推測～

所属施設名：光武内科循環器科病院　療養病棟
研究者名：看護師　杉山　郁果

【目的】神経疾患難病であっても意思表示が出来る患者のメンタル面について学んできたが今回、意思を表現できない進行性核上性麻痺患者の行動や態度の変化から心理状態を推測できるかアプローチしてみる

【対象】A氏　67歳　男性
63歳で呂律不良が出現。65歳、四肢の力が入らなくなり受診。
66歳で進行性核上性麻痺と診断。

【方法】①カルテ・リハビリ記録からの情報収集
②妻からの情報提供
③心理状態はキューブラ=ロスの死の受容モデル5段階を用いて推測

【結果】病状の進行に伴い怒りと抑うつを繰り返しながら受容することが出来た。

【考察】行動や態度の変化から心理状態を推測することが出来た。

メッセージ

今回は発表会に出席できずすみません。光武病院の5年間メンタルケアの計画は今回で4年目になりました。光武病院の山内加代子さんの高齢者の心理をはじめ、壱岐のこころの東谷弘美さんの神経難病患者の思い、同じく梅田美和さんの神経難病患者の心の変化、今回の杉山郁果さんの進行性核上性麻痺患者の症状と精神的変化について発表がありました。現場においてこのような患者にどのように対応するかを委員会の来年の指定演題として発表することにしました。また看取りやホスピスを経験したことがある施設も積極的に発表をお願いします。

壱岐市医療福祉研究発表実行委員会　頼嘉珀